

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 17 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21530495

研究課題名（和文）「社会」イメージの復権と社会構想の社会学

研究課題名（英文）Restoration of “The social” Image and Sociology of Social Design

研究代表者

友枝 敏雄（Tomoeda Toshio）

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号：31026130

研究成果の概要（和文）：日本社会が「第 2 の近代」に突入するなかで、個人化と保守化が浸透していることを高校生調査および大学生調査のデータ分析から明らかにした。21 世紀の社会を構想する際に、「公共性」および「正義」という概念が重要であることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：

In Japanese society which has entered the stage of “second modernity”, the fact that individualization process and conservatism pervade in the society was proved by the quantitative data-analysis of high school students and university students. It was pointed out that the concepts of “publicness” and “justice” are extremely important, when we design the 21st century society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 21 年度	600,000	180,000	780,000
平成 22 年度	800,000	240,000	1,040,000
平成 23 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 24 年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：第 1 の近代から第 2 の近代へ、再帰的近代化、個人化、保守化、公共性、正義、ベック、ギデنز

1. 研究開始当初の背景

21 世紀に入ってから、少なくとも日本社会では、「社会」が見えにくくなっている。特に若い人たちから「社会を実感できない」という声をよく耳にする。格差問題が深刻化し、非正規雇用者は増加しているにもかかわらず、これらの問題が社会の問題として理解さ

れないのである。

多くの意識調査に示されているように、日本人の多くにとっては、社会は、手に届く範囲のなかで、等身大のものとして理解されるようになってきている。つまり家族や友人関係のなかに、社会的なものを見出すのであるが、それより大きい地域社会や国民社会・国

際社会は、自分には関係のない「他人事の世界」として理解される傾向が強まっているのである。もちろん経済成長が期待できないことや、地球環境問題の深刻化が、人々に刹那的な現在中心の価値観を増殖していることも、事実として認めざるをえないであろう。

歴史を少しさかのぼって、あの 1989 年の「ベルリンの壁の崩壊」に象徴的に示された冷戦構造の終焉は、政治社会を「左翼」と「右翼」の軸で語ることを不可能にしてしまった。

「9. 11」以降の世界には、イデオロギーの終焉に伴う共生社会の萌芽がもたらされたのではなく、文明の衝突と「圧倒的な非対称」(中沢新一『緑の資本論』)の渦巻く現実が誕生したのであった。

オーギュスト・コントによって学として創始された社会学の使命は、「予見せんがために見る」ことであり、モデルとしての社会を提示して、私たちが将来へと嚮導することにある。

本研究は、21 世紀に入って、人々の「社会」イメージが変質したという現実をふまえて、このような「社会」イメージ変質の原因を解明するとともに、人々を未来にむけて鼓舞するような社会モデルを提示するための基礎研究を行うことにある。

2. 研究の目的

「社会」イメージを喚起し、社会のグランドデザインを可能にするような社会学理論を構築するという本研究の最終目標に到達するために、社会学理論のメインストリームの検討からスタートして、つぎに掲げる 5 つの研究を実施する。

第 1 に、「第 1 の近代から第 2 の近代へ」をめぐる社会学理論の検討を行う。

近年、社会学理論の動向は、モダニティ論からポストモダニティ(ポストモダン)論を経由して、グローバリゼーション論へとシフトしてきている。このような理論の力点のシフ

トについて、一言で要約することはなかなか困難だが、シフトの背景にモダン社会の変質という共通認識があることは事実である。モダン社会の変質をもっとも的確に表現しているのが、ベック(Beck, U.)の言う「第 1 の近代から第 2 の近代へ」というフレーズである。そこで「第 2 の近代」を論じた社会学者として、ギデンズ、ベック、バウマンの社会学理論を検討するとともに、「第 2 の近代」に特徴的な「個人化」の趨勢と「保守化」の趨勢に注目する。

第 2 に、「個人化」の趨勢を支える思想的背景として、新自由主義(ネオリベラリズム)思想に焦点をあてる。本研究では、とりわけ新自由主義思想の理論的中核として、ハイエクの理論・思想に注目し、その現代的解釈を試みる。と同時に新自由主義思想の対極をなすものとして、『心の習慣』に代表されるアメリカの宗教社会学者ベラーの研究をフォローし、ベラーの立場が「共同体主義」として総括できるかどうかを検討する。

第 3 に、新たな絆(=社会的連帯)の理論的可能性を追究すべく、パットナムに代表される社会関係資本概念の検討を出発点にして、社会関係資本の中核をなすものとして、信頼概念とケア概念に注目する。ギデンズ、ルーマンの信頼概念を検討した上で、ハイデガーの気遣い(Sorge)概念にまでさかのぼってケア概念の理論的彫琢を試みる。

第 4 に、第 1 課題から第 3 課題までの、理論的・学説史的研究をふまえて、「社会」イメージについての意識調査を実施する。

具体的には、大学生を対象にした意識調査を実施する。それとともに 2001 年、2007 年に実施した高校生調査の再分析を行う。これらの計量分析の目的は言うまでもなく、理論的・演繹的に(あるいはシミュレーションによって)導出されたさまざまな概念が、日常

言語のなかで大学生・高校生の抱いているものとどの程度一致しているか、それともずれているかを明らかにすることにある。

第5に、第1課題から第4課題までの研究成果を総括し、「公共性」、「公共空間」、「ケア」、「正義」の概念の理論的検討を行う。

これらの概念が社会理論の基礎としてどのように位置づけられるかを明らかにした後、とりわけ「公共性」と「正義」概念に焦点をあてて、「公共善」へと至る道を探る。これらの概念の理論的武器としての豊穰化が達成されると、新しい社会の構想という作業も、単なる「見果てぬ夢」としてではなく、モダニティの再編をとおして将来社会を見据えるという、社会学本来の形でなされるであろう。

3. 研究の方法

一方での「第1の近代から第2の近代へ」「個人化」「保守化」「グローバリゼーション」「公共性」「ケア」「正義」に関する社会学理論の研究と、他方での「社会」イメージおよび社会観についての意識調査の計量分析とを並行的に行う。データ分析から得られた知見を生かしながら、21世紀社会をどのようにデザインしたらよいかについて、社会学の立場からの分析を試みる。

4. 研究成果

(1) 「第1の近代から第2の近代へ」をめぐる社会学理論の検討

モダン社会の変質を、ベックは「第1の近代から第2の近代へ」というフレーズで的確に表現している。このフレーズの内実をなすのが、ギデنز、ベックのいう「再帰的近代化」である。そこで「再帰的近代化」概念の検討を通して、「再帰的近代化」がリスク社会論と関連していることを明らかにした。

さらに再帰的近代化が、第2の近代の社会変動の趨勢である「個人化」「保守化」の趨勢と関連しているので、学生を対象にした意識調査(大学生・専門学校生を対象にした質問紙調査、1024名分のデータを回収)を実施し、日本の若者における「個人化」と「保守化」の趨勢を検証した。その結果、ネオリベリズム思想に支えられてグローバリゼーションが

進行するなかで、日本の若者に現状を肯定し、日本の文化や伝統を尊重するという意味での「保守意識」が強まっていることが明らかになった。

(2) 新たな絆(=社会的連帯)の理論的可能性

社会学誕生以来のテーマである「個人と社会」の問題を解決するキーワードは、社会的連帯である。社会的連帯の問題は、近年、社会関係資本(social capital)という概念の登場によって脚光をあびている。そこで、社会関係資本の内実をなす、信頼概念とケア概念の理論的検討を行った。その結果、信頼概念・ケア概念を社会秩序の安定性の問題にとっての中核的な概念にするには、信頼概念・ケア概念を役割概念あるいは役割期待概念とどのように接合するかが、重要な問題であることが明らかになった。

(3) 「個人化」を支える思想的背景としての新自由主義思想の研究

新自由主義(ネオリベリズム)思想の1つの理論的支柱とされるハイエク理論を検討した。その結果、ハイエクのいう自生的秩序が、社会学の世界においてパーソンズがテーマとした社会秩序の問題とどのように関係づけられるのかが、重要なテーマであることが明らかになった。

新自由主義思想が個人主義に支えられているのに対して、共同体もしくは集団主義に支えられた理論として、ベラーたちの『心の習慣』の検討を行った。ベラーたちがコミュニタリアニズムを提唱する意図は、明らかになったが、共同体の具体的なイメージが明瞭でないという問題点も明らかになった。

(4) 「ポストモダン論」と「グローバリゼーション論」の検討

20世紀から21世紀への世紀の転換期における社会学の〈知〉は、2つの焦点をめぐって構造化されてきた。その1つが、現代をポストモダンゼーションの過程とみなす「ポストモダン論」であり、もう1つが、現代をグローバリゼーションの席卷過程とみなす「グローバリゼーション論」である。そこでポストモダン論およびグローバリゼーション論の再検討をとおして、「第2の近代」を捉えるのに有効な社会的概念としてベックのリスク社会論であることが明らかになった。

(5) 新たな絆(=社会的連帯)の端緒として「公共性」の理論的考察

すでに述べたように、社会学誕生以来のテーマである「個人と社会」の問題を解決するキーワードは、社会的連帯である。社会的連帯の可能性は、公共性概念の彫琢によって明らかになる。そこで公共性概念の吟味を行った。

まず公共性とほぼ同義な英語として、public sphere、public space、publicness(日本人による造語)があることに注目し、公共性(=公共空間)が、第1にmarket(市場原理)に対立するものとして、第2にnationalなもの(国家・国境)に対立するものとして、第3にindividual、individualizationに対抗するものとして概念化されることを明らかにした。

さらに公共性(=公共空間)が「公共善」に関わるものであるから、正義をどのように理論化したらよいかという問題について考察した。「正義は存在するか」という問いから出発して、正義の積極的な定義の可能性として、「社会に存在する不合理的な苦痛を減ずる価値」および、すでに市井三郎、高坂健次によって言及されている「幸福の加算から不幸の減算へ」という価値観の転換の重要性を指摘した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計1件)

- ① 友枝敏雄「リスク社会における若者の意識」, 『教育と医学』 査読有, 705号, 2012年, pp.62-68

[学会発表] (計3件)

- ① 友枝敏雄「高校生の規範同調志向と保守化」(第67回西日本社会学会大会, 福岡大学, 2009年5月16日)
- ② 友枝敏雄「大衆教育社会における学生の意識(1)2009年学生調査の計量分析から」(第61回関西社会学会大会, 名古屋市立大学, 2010年5月30日)
- ③ 友枝敏雄「社会理論の基礎としての公共性と正義」(第85回日本社会学会大会, 札幌学院大学, 2012年11月3日)

[図書] (計8件)

- ① 友枝敏雄編『現代の高校生は何を考えているか』世界思想社, 2009年, 226頁
- ② 友枝敏雄編『大衆教育社会における学生の意識』, 大阪大学大学院人間科学研究科, 社会学理論研究室, 2010年, 134頁
- ③ 友枝敏雄「社会進化論」「構造-機能主義」「脱埋め込み(離床)」(日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善, 2010年) 945頁
- ④ 友枝敏雄「公共哲学としての社会科学」(井

上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス 第9巻 政治・権力・公共性』世界思想社, 2011年) 280頁

- ⑤ 友枝敏雄「社会理論の基礎としての公共性と正義」(牟田和恵・平沢安政・石田慎一郎編『競合するジャスティス-ローカリティ・伝統・ジェンダー』大阪大学出版会, 2012年) 401頁
- ⑥ 友枝敏雄「社会進化論」「社会的分化」「スペンサー」(大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』弘文堂, 2012年) 1590頁
- ⑦ 友枝敏雄「第2の近代と社会理論」(宮島喬・船橋晴俊・友枝敏雄・遠藤薫編『グローバルゼーションと社会学』ミネルヴァ書房 2013年) 304頁
- ⑧ 友枝敏雄“Publicness and Justice as the Basis of Social Theory” (Tanaka & Zhe eds. A Comparative Sociology of Publicness 中国 社会科学文献出版社, 2013年) 350頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

友枝 敏雄 (Tomoeda Toshio)

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号: 30126230